

Title	<批評・紹介>河南省文物研究所・河南省洛陽地區文管處 編「千唐誌齋藏誌」
Author(s)	池田, 温
Citation	東洋史研究 (1985), 44(3): 541-548
Issue Date	1985-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/154123
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

河南省文物研究所 編
河南省洛陽地區文管處

千唐誌齋藏誌

池田 溫

本書は、河南省洛陽の西四五軒に位置する新安縣鐵門鎮の「千唐誌齋」の收藏する墓誌一三六〇點を、拓本のコロタイプ寫眞で集録した大版圖冊である。卷頭に武志遠・郭建邦兩氏の筆になる概述十二頁があり、そこに「千唐誌齋」の由來と所收墓誌の注目すべき内容の一端にふれた敘説がみられる。『千唐誌齋藏石目錄』は既に一九三五年に刊行され、その名は聞えていて、拓本も相當數が流布しており、専門家には周知の蒐收であつたけれども、第二次大戰を経てそれが安全に保存されたか否か、河南の現地關係者以外にとって消息は乏しく、本書によってその舊態を留めた現状を知り得るのは大きな喜びである。

千唐誌齋の建設者は張鈞（字伯英、號友石主人）、新安出身で青年時代中國同盟會に参加、辛亥革命には陝西新軍起義の策動者の一人として活躍、一九一七年于右任のもとで陝西省靖國軍副司令、三〇年代には河南省建設廳々長や河南省政府代理主席等に任じた。新中国になつてからは政協第二屆全國委員や中央文史館副館長となり、一九六六年病逝した。張氏は康有爲・章炳麟・于右任らと交わり金石の趣味に傾倒し、洛陽の邙山地區から出土する夥しい墓誌の中で、唐代の墓誌類が數が多くて稀少價值に乏しく人々から見棄てられ破壊にまかされがちなのを慨嘆し、一九三二年夏から積極的に蒐

集に努め、五年たらずの間に實に一〇〇〇點餘の唐誌を集めることができた。彼は三五年私邸に地方色ゆたかな煉瓦建アーチ型窯院（三つの長方形中庭と一五の窯洞をそなえる）を建造し、その壁面にズラッと誌石を三、四段に並べてはめこみ、王廣慶氏がこれを「千唐誌齋」と名づけ、章氏に匾額を揮毫してもらつたのである。個人で一〇〇〇個以上もの墓誌を蒐めたこと、そしてそれらを壁面に嵌め込んで永久保存と鑑賞に新機軸を生んだこと、いずれも類稀な業績であり、中國金石學史上不滅の貢獻といわねばならない。

本書は郭玉堂氏舊藏の拓本セット（一九六五年國家に捐獻）を主体に、少數の新拓を加へ編集されている。郭氏は千唐誌齋最大の功臣で、唐誌蒐集に銳意協力したばかりでなく前にふれた藏石目錄の編者でもある。従つて千唐誌齋收藏墓誌の拓本としては、一般に望み得る最善のものと稱してよからう。但だ本書概述にもことわつてゐる如く、壁に凹型にはめこまれた若干は誌面四周周邊部の拓出がむずかしく、又壁面のかどにあたる所の兩側にはめこまれたものは首尾の一行をうまく拓出できないので、四周や首尾の部分がはつきり出ていないものがあるのはやむをえない。誌蓋の拓本は九二點存するのに、現存する蓋はわずかに四點で、壁にはめこまれていなかった誌蓋は半世紀の間に大部分失われてしまつた。誌蓋拓本の殆どは本書編纂に際し本來の歸屬を確かめ得たが、七點のみは所屬未詳で、卷尾に附録されている。

本書の最大のメリットは、何といつても一三〇〇餘點という大量の墓誌の原形を廣く學界に提供したことにある。拓本の圖版は大體二〇（二二）厘四方の大ききで、原形を髣髴させ、大部分のものは原文の識讀が容易であつて、居ながらにして誌の内容を研究に利用で

朝		代	年 數	千唐誌數	傳 館 拓 本 數	
唐 前	晉		155	1	10	
	南 北 東 北 北	朝	170	0	2	
		魏	148	3	256	
		魏	16	0	32	
		齊	31	0	37	
		周	24	0	12(+6)	
	隋		37	2	152	
唐 (含周)	高 祖(武德(開明))		290	9	0	6
	太 宗(貞 觀)			23	48	134
	高 宗(永徽~弘道)			34	288	638
	武 后(嗣聖, 文明~長安)			21	173	315
	中 宗(神 龍)			5	24	37
	睿 宗(景龍~太極, 延和)			3	28	64
	玄 宗(先天·開元·天寶)			43	334	578
	肅 宗(至德~上元(聖武·順天))			6	11	14
	代 宗(寶應~大曆(顯聖))			18	27	57
	德 宗(建中·貞元)			25	49	95
	順 宗(永 貞)			1	1	5
	憲 宗(元 和)			15	29	93
	穆 宗(長 慶)			4	7	18
	敬 宗(寶 曆)			2	5	14
	文 宗(大和·開成)……			14	46	83
	武 宗(會 昌)			6	19	35
	宣 宗(大 中)			13	53	100
	懿 宗(咸 通)			14	45	76
	僖 宗(乾符~文德)			15	11	36
	昭 宗(龍紀~天復)			15	0	9
	昭宣帝(天 祐)			4	0	2
	年 代 未 詳				11	25
	蓋				7	299
	唐 計				1209(+7)	2733
唐 後	五 北 南 遼	代 十 國	54	22	46	
		宋	167	85	146	
		宋	153	0	26	
		金	328	0	18	
		元	162	0	17	
	民	明	276	31	48	
		清	268	1	21	
		國	74	6	19	
	無 誌	年 月 蓋		0	10(含疑偽作3件)	207
總 計			1360(+7)	3798		

一年あたり誌数が最大となるのは洛陽の千唐誌及び全國の傳館拓本を通じて、高宗・武后朝であり、それに次ぐのが玄宗朝である。中唐以降は激減し最も多い宣宗朝ですら唐前期の半ばにすぎない。これらを通じて、千唐誌齋收藏の洛陽出土墓誌が、唐全土の全體的傾向をかなりよく反映していることが窺われる。

もっとも墓誌埋納は現代に至るまで連綿と續いており、宋以降の墓誌の絶対数が唐誌をはるかに上回るとは疑いない。但だ洛陽邙山や西安郊外等隋唐以前の帝都の墓區が集中的に盜掘される傾向のあった爲と、楷書の美しさから隋唐誌が廣く愛好され拓本が多く流布した結果、右掲の統計數字に代表される現狀がもたらされたとみられよう。これらの數字は巨視的に見て、隋唐時代の戸口統計と概ね併行しており、戸口の充實した平和な時期に多く、戰亂時に激減している。只戸口統計の極大値を示す天寶時代ではなく、高宗武后期に誌數のピークがみられる點は興味深い。これは社會の上流中流を占め、主に石誌を造る階層たる士人達の社會經濟的實力が、この時期にその最盛期を有したことを示唆しているよう。

千唐誌中には、屈突通（九、本書通し番號、以下同）・慕容三藏（二八二）・長孫祥（二九一）・崔泰之（六三〇）・李信（六五八）・李邕（九一七）・李皋（九七二）・崔弘禮（一〇四三）等の如く、正史に傳のみえる著名人も含まれ、又故衢州司參軍李府君（壽）誌（九三〇）のように獨孤及の撰文になり、『毘陵集』卷二（『全唐文』卷三九一）所收は現行本毘陵集とは同じに誌文の傳存したものもある。文集の傳える誌文に比べると、石誌の文はまず首行の誌題に「皇五從叔祖」の五字を加え、歿年月日を「乾元二年六月十六日」、年壽を「五十」、權窆時期を「七月十六日」と明記している

他、本誌の埋納時日も「大曆九年夏四月廿八日」と文集の四月二十七日と一日差異を含む。その他曾祖李道立の任官を、「臨濟陳三州」に作り文集の「陝濟陳三州刺史」と一致しない。もとより本誌石の出現により『毘陵集』の本文が九〇數%まで原文を忠實に傳えていることが確認されたわけであるが、しかし個人データとして重要な没日や年令等が文集では某月日・若干等と略記されているので、誌石の史料價值は文集を數等上回るといわけばならない。又州名の小異も、刺史在任表を作るといった作業に際してはその影響する所些少にとどまらぬ。かように原文の傳存する場合にも誌石により校訂できる所を看過してはならないのである。又この對校を通じて毘陵集現行本（四部叢刊所收明趙氏亦有生齋刊本）の傳寫の間に生じた譌誤の程度を客觀的に計量し得ることとなる。なおこの宗室李壽については四年後に梁肅の撰した改葬墓誌（九三八）があるが、偶然李壽夫人獨孤氏の誌も同時に梁肅が作っており、その誌文は『文苑英華』卷九六六に收められ今日に傳わる。千唐誌の刊行により我々は梁肅の撰した李壽夫妻の兩誌を机上に並べて見ることが始めて可能となったのである。

武・郭兩氏の既に指摘された如く、長壽二年陳察誌（四〇九）により隋末薛舉の舉兵に際し曲水縣人楊洛が縣城によって相應じたことを知り、聖曆二年崔玄藉誌（四五三）を通じて永徽四年睦州の女傑陳碩眞の起義の情況を窺い、貞元一五年嗣曹王李皋誌（九七一）や貞元二〇年陳皆誌（九八五）によって、袁晁の起義軍討伐の實情が傳えられ、或いは聖曆二年王德表誌（四六二）・開元二十一年裴同誌（七三一）により、萬歲通天元年の契丹首領李盡忠らの反唐舉兵の經緯を教えられ、天寶四載和守陽誌（八二四）により磧西支度營田

判官・北庭副都護に任じ西域經營に活躍した事蹟が明らかに
等、誌文を精讀することによって史籍の記事を補い、乃至裏附ける
情報が種々得られることはいうまでもない。聖武元年正月二日の
女道士馬凌虚誌（刑部侍郎李史魚撰、九〇二）には、安祿山の凶威
を懼れ開元觀を聖武觀と改稱していたことが見え、聖武元年三誌
（九〇二・四）・同年二誌（九〇五・六）・順天二年一誌（九一
二）・顯聖元年一誌（九一三）・同年二誌（九一四）の如き燕の年
號を刻す諸誌の存在は、安史の亂の深刻な影響を雄辯にものたっ
ている。

他方長壽二年王貞誌（四一一）により『韻苑』十卷、聖曆二年蓋
陽誌（四五二）により『道統』十卷、聖曆二年王德表誌（四六二）
により『注孝經』『春秋異同駁議』三卷『道德經注』『金剛經注』
『文集』五卷、宋康定二年王貽敬誌（一二六五）により『琬琰集』
百卷、元祐八年魏孝孫誌（一二九一）により『詩集』『南遊記』一
卷『道德經注』二卷『抱一集』十二卷『羣珠集』二卷『吳越方言』
一卷といった失傳の著作のあったことを知る。これら政治史・文化
史上の個々の新知見にとどまらず、千唐誌全體を通じて清河崔氏・
范陽盧氏・隴西李氏・滎陽鄭氏の四姓に屬する者の墓誌が二〇〇以
上もあり全誌の一六%強を占める事實は、門閥士族集團が唐代にい
かに顯著な存在であったかを教え、それが宋代になると八五誌中一
つも四姓が見當らぬ點と相まって、唐宋間における名族没落の大勢
を明示してあまりある。

守屋美都雄氏の太原王氏研究が先鞭をつけ、Ehrey, Johnson,
毛漢光、吉岡眞氏らにより發展されている氏族研究にとって、千唐
誌が有益な系譜・通婚・官歴データを少なからず提供することはい

うまでもなく、また愛宕元氏の洛陽近郊の郷里村研究の類にも若干
の資料の追加が期待される。その他唐後期財政を追求される高橋繼
男氏は、先に諸資料を博搜して作られた巡院と知院官の表を、千唐
誌によって新たに四件追加された（一九八五夏期唐代史研究會報
告）。かように唐史研究が相當精密化しつつある今日、一〇〇餘
の洛陽墓誌の提供する情報は多くの方面に貢獻し得るのである。

ここで本書に年號紀年不詳として登載された唐前試大理評事兼監
察御史孫公亡妻隴西李氏墓誌銘并序（一二〇五）の年代について私
見を述べておこう。誌文に「大唐乙亥歲六月十六日終于東都教化里
之私第、春秋廿四」とあり、この乙亥を何年に比定すべきかが問題
である。系譜關係で誌文に記される所は、李氏が宗室の大鄭王房に
屬し、祖暄は台州刺史、父叔康は前任杭州□安縣令、外祖博陵崔陵
は皇朝戸部侍郎鳳翔節度使の諸項である。『新唐書』の宗室世系表
上には大鄭王房の詳しい系譜を含むが、そこには暄・叔康の名は見
えない。但だ大鄭王房の始祖淮安靖王神通の曾孫の世代に、齊安
（陝王府戸曹參軍）齊古（少府監）暉（文部侍郎）晔（刑部侍郎）
吁（符寶郎）の兄弟を掲げており、この部分の記述が盛唐天寶・乾
元時代の記録に基く事情が窺われ、暄が末弟に當り當時未だ出身し
ていなかったとすると表に現れなくとも不思議はない。他方戸部侍
郎の崔陵は、元和末から長慶二年にかけ在任した崔俊と認められ、
彼はその後鳳翔節度使に任じており、幸い元稹の撰した崔公墓誌銘
が『元氏長慶集』卷五四に傳わっていて、その事蹟を詳しくたどる
ことができる。崔俊の名を墓誌以下多くの資料が人偏に作る中で
『吳郡志』卷一一に崔陵とする例もあり、同音類字なので混用され
ることもあったと解し得よう。以上によれば崔陵（俊）の娘の女子

に當り、同時に李暄の孫の志主李氏は九世紀中葉の人となり、從つて卒年乙亥は大中九年（八五五）と斷定できる。ところが近刊の『歷代墓誌銘拓片目錄』（一一〇頁、一一七八號）は本誌を上元二年（六七五）に繋げ、外祖崔稜を北齊の人と認めている。しかし本誌を一讀すれば現れる官名等からこれが中唐以降に屬することは一目瞭然であつて、恐らく右の目錄編者は外祖名をカードで見ても北齊人と早合點し、本文を丁寧に讀まずに（或いは拓本が不良で官名等の部分を讀みとれなかつたか）誌の乙亥を上元二年に比定したものであらう。

以上話がややわき道に入つたが、整然と排列された千唐誌を通覽することにより、唐史の流れを大觀することが可能であり、同時に文體や字體・書風の推移もおのづからたどることができ。卷頭概述は、咸亨元年蓋著誌（二五八）と久視元年袁公瑜誌（狄仁傑撰書、四八一）を虞世南風、聖曆二年崔玄藉誌（四五三）・開元十年楊曜誌（六二四）・天寶一一載順節夫人李氏誌（李湊書、八七〇）を褚遂良風、貞元五年孫公夫人李氏誌（李公輔撰書、九四九）・廣明元年柳延宗誌（薛繹撰書、一二〇三）を顏真卿風の楷書の名品に擧げており、隸書には貞觀元年關道愛誌（七）・開元一二年崔泰之誌（李迪書、六三〇）・天寶一〇載倪彬誌（八六八）、行楷にも開元一二年趙潔誌（六三七）・天寶一一載崔澄誌（八七四）のように見るべきものが含まれている。いづれにしても、唐人の撰になり唐人の書いた一二〇〇の唐人の傳記に容易に接することができるのは、本書のおかげであつて、我々はその刊出を心から歓迎する。

實はこの所唐代墓誌に關する重要な出版が相ついでいる。その第一は饒宗頤編になる『唐宋墓誌——遠東學院藏拓片圖錄』（香港、一

九八一）であり、バリの同學院所藏拓本三八八點の圖錄と解説を含む。本書については先に吉岡眞氏の紹介（廣島大學文學部紀要四三卷、一九八三）があり、唐誌三七〇點について綿密な注記・補訂を加えられていて、唐代墓誌に關心をもつ者の必讀の文字といつて過言でない。本書に惜しまれる所は圖版の大きさが大體一〇—一五厘四方とやや小さく、讀みにくいものの少くない點である。しかし索引を含む饒氏の整理と相まつて、西歐にある拓片を容易に参照できる利便は大きい。

次に唐代墓誌を網羅し圖版・釋文・解説・索引を完備した大著『唐代墓誌銘彙編附考』が毛漢光氏の努力で刊行が始まつた。本書は『千唐誌齋藏誌』とは同じ大型本で、第一冊（毛漢光撰、盧建榮助理、一九八四年六月、本文四五四頁）には開明元年（武德二年）那盧氏夫人元買得誌以下貞觀二〇年四月楊德誌に至る一〇〇件、第二冊（毛漢光撰耿豐玲助理、一九八五年一月、本文四〇九頁）には貞觀二〇年五月から永徽三年一〇月一日に至る一〇〇件を集録し、各冊に人名・地名・官名三種の索引を附している。本書は唐代墓誌銘の編年排列による集大成を意圖しており、拓本の無いものも石刻關係書の錄文や文集・總集から採録しており、全體では三千數百點を超え三〇數冊に達することが豫想されており、完成までには少くも一〇年を要する大事業である。所收各點について標點を施こした錄文が明朝體活字で美事に印刷され、更に附記として碑誌來源・拓片形制・碑誌之其他版本（校勘を含む）・誌主在正史中是否有傳・世系・碑誌立處・誌主之歷世時期・婚姻關係・特殊事蹟・異形碑體字等の諸項が詳記される。その入念な仕事ぶりは、例えば第二冊所收貞觀二二年文安縣主誌（一二四）について中央圖書館所

藏拓本と共に『全唐文』巻九九四はじめ『昭陵碑考』『金石續編』・『隋唐石刻拾遺』・『陝西金石志』等實に一五種に及ぶ金石書を参照して録文校訂に資しているのにも明らかである。既刊二冊に収める二〇〇誌の來源は、中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館所藏藏志拓本一七三、中央圖書館所藏拓本八、『全唐文』二、『唐文拾遺』一、『唐文續拾』一、『芒洛家墓遺文』（續・續補・四集を含む）八、『東都冢墓遺文』一、『關中金石文字存逸考』一、『陝西金石誌』一、『漢魏南北朝墓誌集釋』一、『西安郊區隋唐墓』一、『考古學報』一、『文物』一となっている。これによって八六%まで傅斯年圖書館收藏の拓本をまず利用したことが明らかで、傳館の唐誌拓本蒐集の全唐誌に占める比率の極めて高い點が注目される。同時に近年の中華人民共和國の出版物まで網羅することは、編者の資料搜訪が頗る徹底していることをものがたり、卷頭總序に附す引用書籍目録が實に一八六種（第二冊で追加三種）に上るのもそのあらわれである。ただ惜しむらくは『千唐誌齋藏誌』を参照しないうちに刊行が始まったので、千唐誌の大部分（七〇點）を拓本によって収録したもの、永徽三年以前に屬する餘唐（千唐誌三六）・楊全（同五三）・劉初（六一）・鄉君和氏姬（六七）の四誌を失收している。本書の圖版はアート紙に拓本の寫眞を『千唐』とはほぼ同大に掲出しており、録文と相まって参照價值が大きい。千唐誌の拓本についてみると、『千唐』のコロタイプ圖版には鮮明度の及ばぬのが一般であるものの、例えば張伯誌（千唐一六、彙編三五）の拓本では『千唐』の寫眞に中央から上邊にかけての斷裂が見え、『彙編』圖版にこの斷裂が現れぬので、傳館拓本がこの斷裂以前と認められるような場合もあり、部分的に『千唐』拓本を補う點もないではない。

本彙編の録文は概して極めて入念に作製されており、編者の努力に對して深い敬意を覺える。『千唐』所掲の拓本寫眞と較べると、例えば貞觀一七年馬志道誌（千唐二九、彙編八四）の彙編録文三八三頁本文第2行□其↓玉質、同頁第8行□□↓朗曜、三八四頁第1行□↓齡、第4行□□↓弥篤、第7行□。陵□↓迹。陵谷、貞觀一八年王仁則誌（千唐三〇、彙編八六）三九三頁本文第6行□↓應、貞觀一十九年張綱誌（千唐三三、彙編八四）四三五頁本文第1行諱□、字□□↓諱綱、字遵即、□紳□承、□↓摺紳士子、奔、四三六頁第4行□傲↓嘯傲、永徽二年李善誌（千唐七〇、彙編一八一）三三九頁本文第2行彈□↓彈基、第6行英□□迹↓英聲美迹の如く、部分的に讀み増し讀み改めることが可能となる。しかし千唐誌についても郭玉堂本と傳館本兩種の拓本が寫眞印刷されることは、大きな意味があり、利用者にとって複数の拓本を容易に参照し得ることは大變な便益である。願わくはこの困難な大事業が順調に進行し、中國石刻史料の一大金字塔の完成を眼のあたりにする日の近からんことを。なお李密誌（彙編三）のように『全唐文』と『濬縣金石錄』から採られたものは、『全唐文』の原據たる『文苑英華』巻九四八にも原文の存することを注記する方が讀者に親切と思われる。他方溫彥博誌（彙編五七）の如く偽作説の行われているものは、それを掲げた上で「然れども本拓片の墓誌文恐らくは偽作に非ず、なお史料價值あるに似たり」との判斷を示されており、關係資料を網羅して拓本を研究者の利用に供する趣旨からいって、偽託の懸念あるものも彙編に加えられるのに賛成である。讀者は採録された關係資料に眼を通し、自らの判斷に従って用うべきを用いばよい。

『千唐誌齋藏誌』をはじめこれら近刊諸書によって、唐人墓誌が

ぐんと我々の身近かな存在となった。千唐誌中には大中五年光祿苗卿家人吳孝恭誌（一一一二）の如き解放された家奴の墓誌まで含まれ、唐代社會の多様な側面を窺わせてくれる。これら墓誌の活用を通じて、一層きめ細かな追求が唐史各般に展開されることを期待したい。

一九八四年 一月 北京 文物出版社

三六×二七釐 上・下二冊

一七+一三六〇+三四頁 一六〇元

（附記）本稿校正中に『唐代墓誌銘彙編附考』第三冊（毛漢光撰、耿慧玲助理、一九八五年五月、本文四一四頁）に接した。永徽三年十月～顯慶元年九月の一〇〇誌を収め、その來源は、傳館拓本八六、中央圖書館拓本三、『芒洛冢墓遺文』（續・三・四編を含む）九、『濟南金石志』一、『陝西金石志』一となっており、千唐誌三五點を含むが、永徽五年二月の韓邏誌（九二）只一點を失載する。